



こぎつね



源じいさんの山小屋

たなかいっけい

こぎつね（源じいさんの山小屋）

源じいさんの山小屋にも、おそい春がきました。
よく晴れた日です。

町まで、買出しに行った源じいさんは、せなかに大きなにもつをせおって
山道をゆっくり登ってきます。

けわしい上り坂にさしかかったときでした。
がけの下から「タ・ス・ケ・テー」とよわよわしい声がきこえます。
源じいさんが、耳をすまして声のするほうを見下ろすと
いっぴきの、きつねのこどもが岩の間にはさまって動けなくなっているのが見えました。
「こりや大変だ」

「いま助けにいくからなー」
源じいさんは、こぎつねに声をかけて、大きなにもつをおろすと、がけをおりていきました。
谷そこへついた源じいさんは、
岩のあいだから、そとこぎつねを抱き上げました。
さいわい、まえ足にすこし、かすりきずがあるだけで、ほかはどこも、けがもなく元気でした。

こぎつねを助けて、がけを登ってくるとちゅうでした。
とつぜん突風がふいて、がけの上の小道においてあった源じいさんのにもつが、
がけを、ころげおちてしまいました。

谷そこで、たくさんのにもつが、ばらばらになってしまいました。
源じいさんが、こぎつねを抱いたまま谷そこを見ていると、どこからか、
きつねが何10匹もやってきて谷そこの、ばらばらになった、
かんずめやパンや紙袋を集めはじめました。

源じいさんのそばへ、大きなきつねが近づいてきて、
くると宙返りをすると、きつねは人間の女の人になりました。

「ぼうやを助けてくれて、ありがとうございます。
谷そこのにもつは源じいさんの山小屋へ、わたしどもがはこびます」

そう言って、源じいさんのうでから、こぎつねを受けとると、ふかぶかと、
おじぎをして谷そこへおりていきました。

とちゅうで、女の人はきつねのすがたに、もどっていました。

源じいさんが、山小屋へ着くと、谷そこへ落ちて、ばらばらになった、
にもつが、戸のまえにつんでありました。

源じいさんは、にっこりほほえんで山小屋の上のほうにあるお花畑を見あげると、

何10匹ものきつねが花のかげから、源じいさんを見ていました。

よく晴れた空に、きつねのすがたをした、まっ白い雲が浮かんでいました。

おわり